第一次世界大戦戦没者追悼と巡礼
――ロンドン「大巡礼」とイープル「戦場巡礼」――

吉　田　正　広

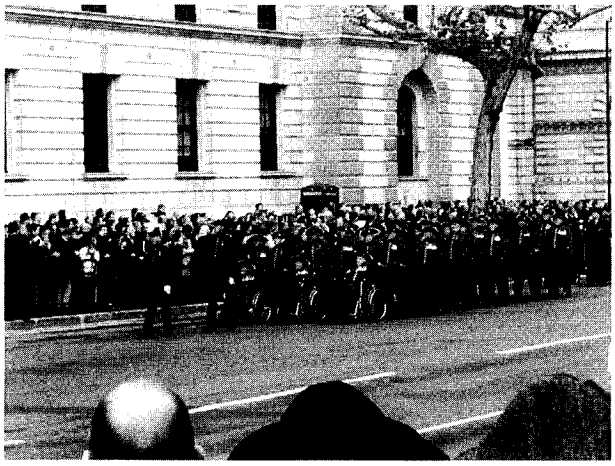
は　じ　め　に

11月11日はヨーロッパの人々にとって１年の重要な節目となる。われわれ日本人が８月６日や８月15日を記憶にとどめるための様々な式典を行っているのと同様、ヨーロッパでは11月11日が人々の死を考える大変重要な日である。2007年11月８日から20日にかけて、第一次世界大戦の戦没者追悼が現在どのように行われているかを知りたくて、ロンドンとベルギーの都市イープルを訪れた。以下、調査の概要を紹介するとともに、現地で実際に体験したこと、感じたことを記録しておきたい。それを通じて、現在のイギリス人にとって第一次世界大戦の戦没者追悼が、現代の巡礼行為に相当するのではないかということを考えてみたい。

1　ロンドン「大巡礼」

第一次世界大戦の休戦の１年後、1919年11月11日午前11時、国王ジョージ５世の呼びかけで「二分間の沈黙」 two-minutes silence が行われ、仮のセノタフ temporally Cenotaph がラチェンズの設計でホワイトホールの通りの真ん中に建設された（セノタフとはギリシア語で空の墓の意味）。追悼式典では、国王によってポピーの花輪がセノタフに捧げられ、そのあと退役軍人がホワイトホールの通りを行進し、セノタフを通過するときに敬礼をする儀式が、以来続いている。当時この儀式への参列は「大巡礼」 Great Pilgrimage と呼ばれ、戦死者の追悼が「巡礼」という言葉で表された。この仮のセノタフは式典終了後撤去の予定であったが、戦死者の遺族や退役軍事たちの「大巡礼」が続き、結果として政府は通りの真ん中に設置された仮のセノタフを撤去できなくなり、恒久的セノタフ permanent Cenotaph の建設を進めることになった。

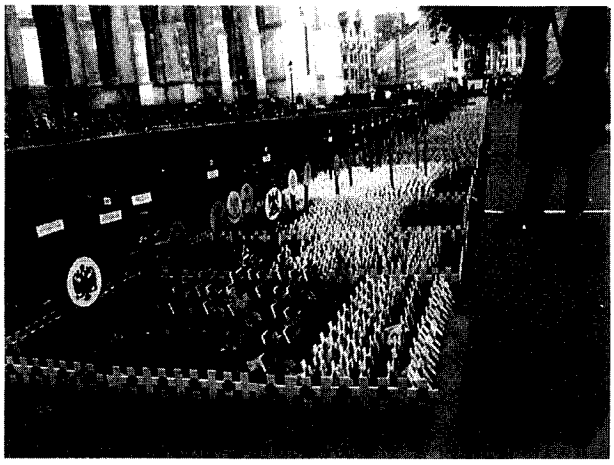
11月11日のセノタフでの戦没者追悼式典



退役軍人（チェルシー・ペンショナー）の行進

今回この儀式を体験することが調査の一つの目的であった。当日セノタフへ行くと、式典の会場は封鎖され、一般の参加者は空港で使われるものと同じエックス線の荷物検査を受け、ボディチェックの上、ようやく近くまで行くことを許される。退役軍人らしき胸に勲章を付けた人、老人から若者まで多様な人たちが一般参加の列に加わっている。子ども連れもいれば、カップルもいて、比較的楽しい雰囲気であった。ただし後ろになってしまった私は背の高いイギリス人の間で

は子どものようで、式典を直接見ることができず、手を伸ばして写真を撮る位であった。しかしこのような人混みの中でも、セノタフの先端にある空の棺はかろうじて見えた。セノタフがなぜあれほどの高さのものか、ここに来て初めて理解できた。やがて11時になってハイドパークから大砲の音が響くと静まりかえり、遠くの鳥のさえずりだけが聞こえて来た。ロンドンでこれほどの静寂は経験したことがなかった。セノタフの棺がかろうじて見えるなか、雲の間から青空が現れ始め、何か奇跡でも起きたような感動的な場面である。それが終わるとしばらくして退役軍人のパレードが始まり、人々は歓声をあげて拍手を送っていた。パレードでは人々は本当に楽しそうに声援を送っていた。なお、この様子はＢＢＣを通じて全国に実況放送されている。夕方ホテルに帰ると、そのダイジェスト版がＢＢＣで放送されていた。

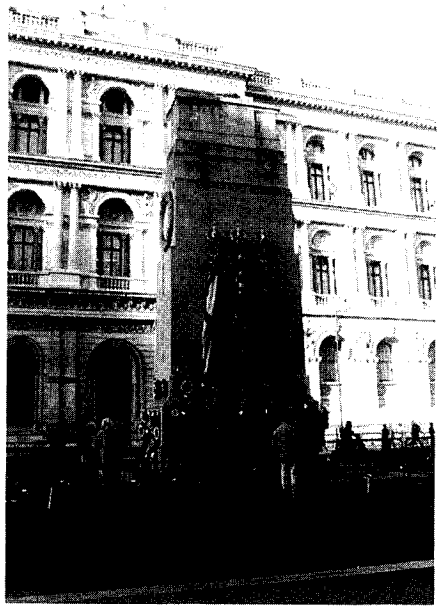


ウェストミンスター寺院での「追悼の庭」

この時期のロンドンでは、戦没者の追悼、あるいは戦争にまつわる様々なイベントが行われている。ウェストミンスター寺院の境内では、この時期にミニチュアのポピーの十字架を芝生の庭に立てる「追悼の庭」field of remembrance が行われ、多くの人々が訪れている。これ自体は1928年に始まった英国退役軍人協会 Royal British Legion の寄付金活動でもあるが、ロンドンの風物詩として定着している。私も、何回か通っているうちに、祖父がニュージーランド部隊に参加した退役軍人であった人と話をする機会があった。戦死者の追悼はイギリス人だけでなくかつての帝国の様々な部隊に関わっている。しかも、第一次世界大戦の戦死者だけでなく、第二次世界大戦、スエズ戦争、フォークランド戦争、現在のイラクやアフガニスタンでの戦死者の追悼という意味合いも含んでいる。

ロンドン市長就任パレードでポピーのバッジを売る退役軍人

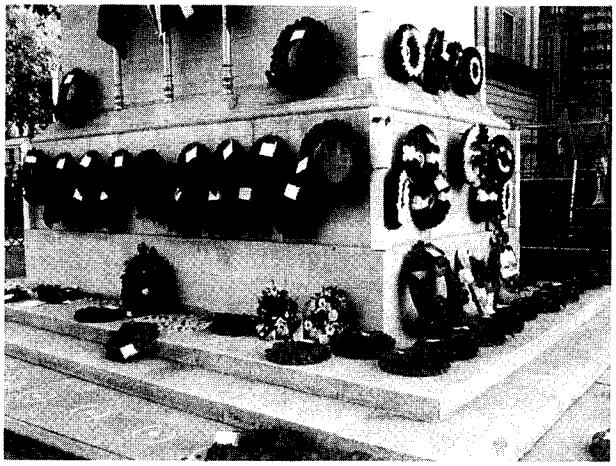
また、この時期、多くの人々が胸に赤いポピーの造花を付けて、退役軍人団体への寄付とともに、戦死者への追悼の気持を表している。そのことは知ってはいたが、街中でこれほど多くの人々が付けているとは思わなかった。そのほかこの日の前後は、様々なテレビ局で第一次世界大戦の戦死者の追悼番組が放送されている。当時の兵士一人一人を個人史のレベルまで精しく調べ、現在の子孫とのインタビューで構成される番組もあった。



11月12日式典翌日のセノタフ

前日11日10日の土曜日にはロンドンのシティで、ロンドン市長就任パレードがあって、ロンドン市内の戦争記念碑の写真を撮っていた私は、偶然に見物することになった。パレードには退役軍人だけでなく、現役の軍隊が参加し、本物の機関銃や装甲車、第一次世界大戦当時の戦車まで出てくる。これは軍事パレードではないかと思うほどであり、驚きであった。その夜ホテルに帰ってテレビをつけると、ＢＢ

Cではアルバートホールで開かれている「戦没者追悼フェスティバル」が実況放送されていた。これも毎年恒例の土曜日の行事であり、英国退役軍人協会主催で、女王をはじめ王室も列席する。今年はイラク戦争で夫を亡くした兵士の妻や子どもが式典に参列し、その主役の地位を与えられていた。式典の最後には戦没者名簿Book of Remembranceにイラクで戦死した兵士の名が刻まれ、上から赤いポピーの花びら（造花）が降り注ぎ、最後はその名簿が赤い花びらで見えなくなるという演出までなされていた。式典の司会はＢＢＣの人気キャスターが努めていた。このような式典は、日本では考えられないことである。



11月12日式典翌日のセノタフの基壇
（前日に捧げられたポピーの花輪が置かれている）

なお、今年は11月11日が日曜日に当たったため、10日土曜日から11日日曜日に式典が行われたが、例年は11月11日のあとの最初の日曜日が「戦没者追悼日曜日」となり、セノタフでの儀式が行われている。いずれにせよ、例年この時期には多くの人々がロンドンに「巡礼」に来ると考えてよいであろう。巡礼の目的は戦死者を象徴するセノタフの棺である。しかも、それを感動的なものにする様々なイベントが二日間に渡って繰り広げられるのである。人々は否応なしに敬虔な気持になるのではないだろうか。ただし、翌12日月曜日の『ガーディアン』（比較的リベラルな高級紙）には、セノタフの儀式が現在のイラク戦争を正当化するものであるとの批判的な記事が掲載されていた。やはり、このような儀式には批判があることを知り、私としてはほっとした。

2　イープル「戦場巡礼」

さて、翌日はロンドンから列車でドーヴァー・プライオリー駅、バスでドーヴァーのフェリーターミナルと乗り継ぎ、フェリーでカレーまで渡り、カレー・ヴィル駅からフランス国鉄でリール・フランドル駅に到着した。夕方になってリールに１泊することになった。リールはフランス北東部の中心都市で、中世以来の都市であるとともに19世紀に工業都市としても発展した。ここはベルギーとの国境に近く、ブリュッセルとロンドンを結ぶユーロスターの停車駅でもある。泊まったホテルにはイギリス人の戦場「巡礼者」向けの戦場ツアーの案内も置いてあり、リールがイギリス人にとってはフランスの玄関口という思いがした。ここリールでも11月11日は戦没者記念日であり、リール市民の戦没者追悼のための記念碑にはたくさんの花輪が捧げられていた。

翌日にはフランス国鉄のストライキが予定されていたため、リールの戦没者記念碑をもう一度見るのをあきらめて、リール・フランドル駅からベルギー国鉄の列車でベルギーのコルトレイクへ向かった。そこでイープル（フランドル地方のフランデレン語ではイーペル）へ向かう列車に乗り換えた。途中の車窓からは広大なフランドル地方の農村地帯（第一次世界大戦、第二次世界大戦の戦場）を見ながらイープルが近づく

イープルの中心にある繊維会館（左）と大聖堂（中央後方）

と、イギリス人兵士の墓地が何か所か見えた。

駅からは歩いてヨーロッパの伝統的な都市の中心街へ行き、町の中心に位置するラーケンハレ（繊維会館）に着き、そこの案内所でホテルを予約するとともに、ミニバスでの戦場ツアーに申し込んだ。イープルの町は伝統的なヨーロッパの中世都市の様子を示しながらも、荒んだ感じのしない清潔な町であった。それはあとで気づいたことだが、イープルの都市自体が第一次世界大戦時にドイツ軍に破壊され、戦後に再建された町だったからである。ほとんどがかつての中世の都市のままに再建されていた。つまり、イープルの都市自体が第一次世界大戦の戦争記念碑であると言えよう。警察署の建物の正面に刻まれた「１９１４」という数字がそのことを物語っている。

右から２軒目が戦場ツアーの主催者オーバーザトップツアーズ（突撃ツアー）の店舗

さて、その日の３時がツアーの予約時間であった。待ち合わせのツアーの店（イギリス人向けに戦場関係の図書やおみやげを売る店）に行ってみると、この日のツアー参加者は私一人で、元イギリスの小学校校長レスの案内でミニバンに乗って戦場ツアーに向かった。私は助手席に座らされて、会話をしながらのツアーとなった。

戦場ツアーのミニバン
（Over The Top Tours.Belgiumの表示がある）

最初に向かったのが「エセックスファーム」と呼ばれる墓地で、そこはかつて新兵と任務を終えた兵士の交代の場所らしく、頑丈な作りの豪があった。この墓地で最初に案内されたのが、戦没兵士の最年少15歳の少年兵の墓であった。そこにはひときわ多くのポピーのリースが捧げてあった。また、墓碑が隙間なく並んでいるのは爆弾で遺体の区別がつかなくなった兵士の墓であるとの説明があった。この日は寒い雨の日で、足下はぬかるみ、第一次世界大戦の塹壕はこんな状態だったと想像できた。

次に向かったのはランゲマークというドイツ人戦没兵士の墓地である。ここはイギリス人の墓地とはまったく雰囲気の違う、木々に覆われた暗い感じの墓地であった。ドイツ兵の場合は共同墓地に遺骨が埋葬さ

エセックスファーム墓地の入り口
（別の戦場ツアーの参加者がいる）

エセックスファーム墓地の15歳の少年兵の墓

れ、また、ここが前線であったことの説明を受けた。また、ランゲマークとはもともとの村落の名前で、第一次世界大戦時にドイツ軍によって村人が追放され、戦後に村は再建されたが、追放された村人の一部は移住先であるコルトレイクに留まったとの説明があった。ランゲマークという言葉自体、第一次世界大戦のドイツ軍の蛮行を示す象徴になっているようだ。

このあとは、サン・ジュリアン村近くにある「カナダ人記念碑」を訪れた。これは10数メートルもある思いにふける兵士像の記念碑であった。第一次世界大戦はヨーロッパだけの戦争ではなく、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、インドなど、まさにイギリス帝国規模の戦没兵士のいることが改めて思い知らされた。

ランゲマークのドイツ人兵士の墓
(共同墓地としてここにすべての遺骨が埋葬されている)

このあと向かったのが、タイン・コット墓地であった。ここはヨーロッパで最大規模のイギリス人兵士の墓地である。専用の駐車場は、大型の2階建てバスでいっぱいであった。ガイドの説明では、イギリスだけでなく、フランス、オランダなど各国のバスであるという。小中学生の集団もいれば、兵士のような制服を着た若者のグループもいる。イギリスの兵士は必ずこの墓地を訪れると言うことである。最初に案内されたのは博物館である。そこではパネルによる墓地の説明、第一次世界大戦の戦況の説明、さらに掘り出された砲弾や兵士の遺品、召集令状、戦死を告げる手紙など、戦争に関わる様々な品物が展示してある。そのパネルによるとタイン・コット墓地そのものが、イギリス軍の要塞であったことの説明があり、ガイドの説明では破壊された要塞そのものが現在の墓地の十字架の基壇になっているとのことだった。

タイン・コット墓地
(中央には要塞を基壇とした「犠牲の十字架」がある)

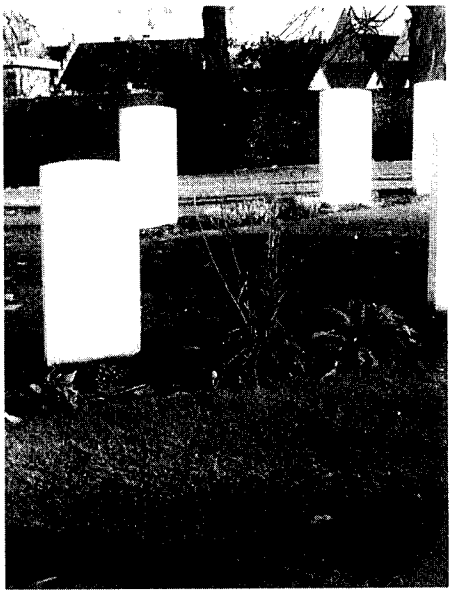
そして墓地に行ってみると多くの人々がここを訪れていた。墓自体はイギリス兵士の墓の典型である、「犠牲の十字架」と「追憶の石」と一人一人の同じ大きさの墓標で構成されているが、周りの壁と中央後部にある神殿のような部分がある。ここには行方不明兵士の氏名が刻まれている。ここでもっとも印象に残ったのは、神殿の中心で、高校生ぐらいの若者たちが賛美歌を歌っていたことである。ここではまさに兵士たちの遺体を前にして、祈りが捧げられているのである。祈りの場であり、戦没者を追悼する、あるいは心に刻む（remember）ための場所なのである。

イープルの市壁と濠の間にあるランパート墓地
(「犠牲の十字架」と墓石が芝の緑と対照的で美しい)

このあとは、62高地近くの「サンクチュアリー・ウッド博物館」で休憩を兼ねた見学であった。ここにはかつての塹壕が保存され、社会見学の場所となっている。私が訪れたときは大雨になったが、小学生ぐらい

の子どもたちが見学していた。社会科の実地教育のようである。ここは博物館とは言っても掘り出された弾薬の筒や武器などが無造作に置かれただけである。当時の写真が掲げてあって、いくつか大変興味深いものもあった。ここに来て何となく興ざめの感もなくはないが、これでツアーの終わりであった。

その翌日の晴れた日、イープル市内に２つある墓地を訪れた。こちらは大変静かな、しかも緑の芝生に囲まれた大変きれいな墓地であった。墓碑の前にはポピーの花がまだ咲いていた。フランドル地方の戦場に咲いていた赤いポピーは、イギリス人にとって特別な意味合いを持っている。この時期はすでに開花時期は終わっていたが、日当たりの良い町の中の墓地にはまだ咲いていたのである。



ランパート墓地に咲くポピーの赤い花

もう一つ忘れてならないのは、イープルの東にあるメニンゲートである。この門は第一次世界大戦後にイギリスの資金で建設されたものであるが、門自体が戦争記念碑である。その壁には、イープル近くで戦死した兵士で遺体の分からない兵士の名が刻まれている。しかも、第一次世界大戦以来毎日午後８時にはラスト・ポストと呼ばれる儀式が行われている。若い兵士が追悼のラッパを鳴らす儀式である。私が訪れたときは、イギリス人の高校生ぐらいの集団が集まって、100人ぐらいはいただろうか。グループの代表がポピーのリースを捧げていた。これもまた、行方不明のまま遺体の分からない兵士たちに対する祈りなのである。

町の外から見たメニンゲート
（門自体が行方不明兵士の名を刻んだ戦争記念碑である）

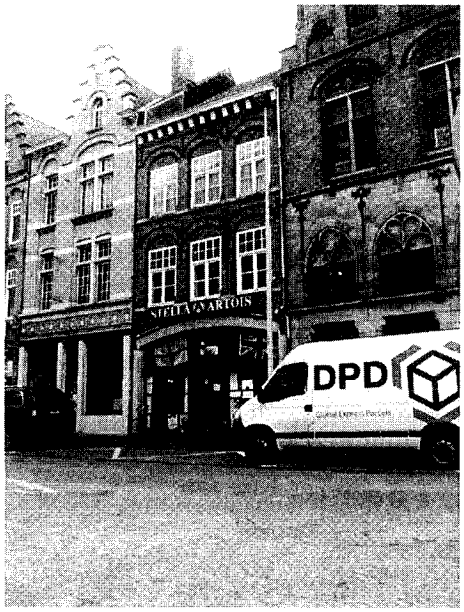
そのほかイープルには、イギリス連邦戦争墓委員会Commonwealth War Grave Commissionの事務所が置かれ、これらの墓地や記念碑の維持管理を行っている。また、イギリス国教会のセント・ジョージ記念教会がある。これは文字通り戦没者の祈りのための教会である。教会の寄付金箱の脇の寄付金を求める案内板には「Dear Visitor and Pilgrim」と記され、ここを訪れる人々を「巡礼者」と呼んでいるのである。また、このイギリスや英連邦からの「巡礼者」を受け入れるためのホテルやＢ＆Ｂ、レストラン、土産物店などが、イープルの町にはあふれている。多くはユニオン・ジャックやポピーの花を掲げ、まるでイギリスの巡礼者のための門前町であるかのように。

真ん中の建物が連邦戦争墓委員会

おわりに

今回の現地調査は第一次世界大戦の戦没者に関わるイギリス人の巡礼行為の研究にとって、貴重な調査となった。現代史の研究にとって現在に引き継がれている儀式や場を体験することの重要性を感じた次第である。プロテスタントで基本的に巡礼に無縁なイギリス人にとって、第一次世界大戦の戦没者追悼記念日のセノタフは、第一次世界大戦の戦没者への祈りとともに、現代のイギリス兵士の日々伝えられる死を心に刻む場であると言えよう。現代の政治とも切り離すことのできないものである。また、第一次世界大戦で戦死したイギリス兵士の墓、あるいは埋葬されることなく戦死した兵士の名前の刻まれたメニンゲートのあるイープルは、イギリス人にとっての巡礼地であった。イープルにはイギリスの巡礼者を受け入れる様々な施設や巡礼者を感動させる様々な儀式が用意されているのである。現代イギリスの巡礼は、20世紀の戦争の死者たちの追悼と密接に結びついていることを実感した貴重な体験であった。

セント・ジョージ記念教会の内部
（ポピーの花輪や連隊旗が飾られている）



イングランド人「巡礼者」向けのパブ兼ホテル
（イングランドの旗とユニオンジャックが掲げられている）

【参考文献】

Alex King, *Memorials of the Great War in Britain: the symbolism and politics of remembrance*, Oxford, 1998.

David W. Lloyd, *Battlefield tourism: pilgrimage and the commemoration of the Great War in Britain, Australia and Canada, 1919-1939*, Oxford, 1998.

Menin Gate and Last Post: Ypres as Holy Ground, Dendooven, 2001.

http://overthetoptours.be/

写真は筆者撮影。